

Nagoya Urban Institute News Letter ニュースレター

名古屋都市センター

2015.3 vol.103

世界の空へ
第2の開港

セントレアの駐機風景

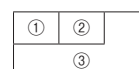
[特集]

新しい国際都市創造の空の原動力

開港10周年を迎えたセントレア

Contents

【特集】新しい国際都市創造の空の原動力	
開港10周年を迎えたセントレア	1～3
PERSON	4
アートプログラム実施報告	5
まちづくり活動助成団体紹介	5
名古屋都市センター研究成果	6～7
まちづくり来ぶらり	8
なごやのまち今昔	9
活動報告	10～11
お知らせ	12



- ① 開港10周年を記念するロゴマーク
② 空港内の商業施設「ちょうちん横丁」
③ 10周年で装飾された空港ロビー

中部と世界をつなぐ国際拠点空港

「中部国際空港」(常滑市、愛称:セントレア)が2015年2月、開港10周年を迎えました。「愛・地球博」の開催に合わせ2005年2月にオープン。以来、中部と世界をつなぐ国際拠点空港として、人と産業のグローバルな出会いと交流、地域の活性化などに重要な役割を担ってきました。華やかなスタート、逆風による低迷、そして近年の回復基調。10年の歩みとこれからを、まちづくりとの関わりを通して取り上げました。



【特集】 新しい国際都市創造の空の原動力

地域や経済界のニーズと情熱から生まれた

日本の経済が急成長し、人々の行動範囲と産業のスケールが大きくなっていく1960年代から70年代にかけ、中部に新しい国際空港を求める機運が高まってきました。それまで中部の空の玄関は、現在の県営名古屋空港です。しかし周辺は宅地化が進み、路線の増加に対応して施設を拡張するのは困難でした。

新しい立地で国際空港を建設しようとする動きは本格化し1985年、建設候補地の選定や基本構想の取りまとめを行う「中部空港調査会」が発足しました。設立母体は、愛知・岐阜・三重の3県と名古屋市および地元経済界です。

さまざまな検討を経て、候補地が伊勢湾東部の常滑市沖に絞り込まれました。陸上への航空騒音を抑制し、しかも必要な規模を確保しやすい海上空港です。1998年、空港を設置運営する官民共同出資の中部国際空港株式会社を設立。2005年2月17日、常滑沖に成田、関西に次ぐ国内3番目の国際拠点空港が開港しました。

顧客満足度は世界トップレベル

海上空港に長く伸びた滑走路は3500m。24時間の運用が可能で、空港施設は、国際線と国内線の乗り継ぎの便をよしたコンパクトな造りです。充実した商業施設や、民間の経営感覚を活かしたハイレベルなサービスも特徴です。空港としてのCS（顧客満足度）で常に世界トップレベルの評価を受けていることが、これを裏付けています。

多くの旅行客が国の内外からやってくる「愛・地球博」が開かれたのは、中部国際空港開港の翌月です。順調な離陸から3年後の2008年、リーマンショックで急降下。低迷期を経て近年業績を順調に盛り返してきました。業績回復の背景に自治体や経済界と一体の取り組みがありました。

愛三岐、名古屋市、経済界などで組織する中部国際空港利用促進協議会は、「フライ・セントレア」「フライ・セントレア・カーゴ」と名付けた利用促進の活動を展開しています。「昇龍道」は、日本を訪れる中国など外国人客を増やすための取り組みです。悲願の第2滑走路の建設は、さらなる需要の喚起が必要となるため、こうした支援が不可欠です。空港を地域や地元の経済団体が支え、空港がその期待に応えようとする一体の取り組みが、中部国際空港の特徴でもあります。

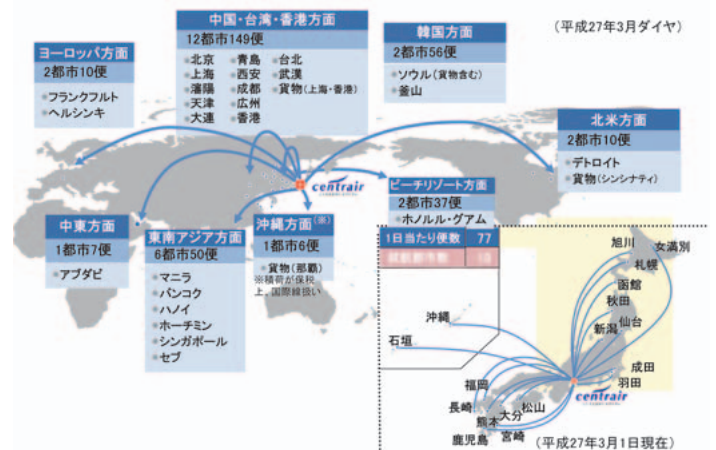
空港の国際性とにぎわいがまちづくりと融合する「中部臨空都市」

空港が持つ国際性やにぎわいをまちづくりに直結させたのが「中部臨空都市」です。空港島の東側と対岸部に合計230万㎡の拠点を

■中部国際空港の運用実績（開港～2014年度）



■中部国際空港のネットワーク
国際線 世界28都市に向け週325便（貨物28便を含む）
国内線 国内18都市に向け1日77便



設定。世界に開かれた研究、生産、商業、物流関連の企業を誘致し、活力ある国際都市を創造しようという愛知県の事業です。

空港の開港当初に物流施設やホテルが相当数立地したもの、その後はなかなか立地が進まない時期もありました。しかし最近では中部臨空都市の知名度アップに伴い誘致も進んでいます。現在、空港島は名港海運、日本通運などの物流企業や、東横インなどの宿泊施設。対岸部は、コストコ、めんたいパーク、イオンモールをはじめとする商業施設など。空港島、対岸部の両方合わせて約40社が進出しています。

国際空港隣接エリアというロケーションをフル活用する展開も見られます。例えば、今秋オープン予定のイオンモールの場合「海と空を120%楽しむエンターテインメントパーク」を開発コンセプトに、サーキットコースや温浴施設などレジャーを楽しめるアクティビティを計画。セントレア利用客を意識したインバウンド対応も進めており、海外からの来訪客も楽しめる和の街並みや、常滑市ゆかりの巨大な招き猫の設置などを予定しています。



中部臨空都市のエリア（空港島と対岸部）

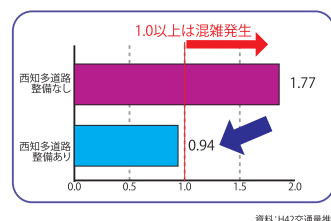


今秋オープン予定の「イオンモール常滑」施設イメージ

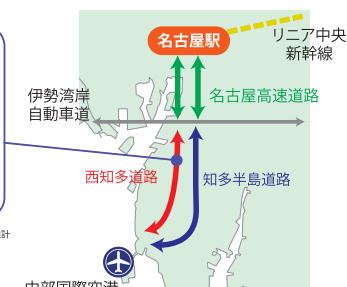
名古屋と空港を結ぶ 道路のダブルネットワーク

臨空都市の建設と並行して、中部国際空港へのアクセス道路の整備も重要です。現在知多半島道路が主要な役割を担っています

【将来交通の混雑度の比較 (H42)】



【中部国際空港へ名古屋駅間のダブルネットワーク化】



西知多道路整備により渋滞が解消!

西知多道路の整備効果

が、観光シーズンは渋滞し、交通事故のときは通行止めになるなど、国際拠点空港へのアクセス道路として信頼性や高速性が必ずしも高くない状態です。

2027年度にはリニア中央新幹線の東京-名古屋間の開通が予定されています。名古屋駅と中部国際空港とがスムーズに結ばれることで、中部がよりパワーアップします。

ここで重要な役割を担うのが新たに計画している西知多道路です。現在、名古屋高速道路と知多半島道路がリンクし名古屋駅と中部国際空港が結ばれていますが、西知多道路が整備されることで、名古屋高速道路と一体となって名古屋駅と中部国際空港を結ぶ「ダブルネットワーク」が完成するのです。

臨空都市の整備が進み、中部国際空港へのアクセスを強化し、リニア中央新幹線のインパクトを最大限に活かすことにより、中部のまちづくりは新しい次元へと飛躍します。中部国際空港は、開港10周年を「第2の開港」と位置付けて、より進化した国際拠点空港をめざそうとしています。それは、これまで同様地域のまちづくりと不可分に結びついています。

あそこへ行けば何かある、何かできる! そんなワクワク・ドキドキする 「私たちのセントレア」になってほしい

日本福祉大学 国際福祉開発学部 教授

吉村 輝彦さん

セントレアについて考えるとき、グローバルネットワークや都市開発といった切り口も大切ですが、周辺地域に暮らす人々にとってどんな意味を持つのかという身近な視点も大切だと思います。旅行者や物流のための「インフラとしてのゲートウェイ」なのか、地域の人々の元気や行動につながる「私たちのセントレア」なのかということです。

それは空港だけが取り組むことではなく、地元の問題でもあります。最近は海外からの個人旅行者が増え、観光の質も変わってきました。名所見物や買い物よりも、訪れた地域ならではの生活や文化に触れようとします。例えば名産品だけでなく、それをつくる人や技術や生活に出会う場が空港や地域にあれば、旅行者にとっても地元の人々にとっても、新しい発見や交流の機会になります。そう考えると地元でできること、地元でなければならないことはたくさんあります。

グローバルとローカルは、相反するものではありません。グローバルな国際拠点とローカルな暮らしや文化が相互に浸透することで、新しい魅力が生まれます。旅行者だけでなく地元の人々にとっても「あそこへ行けば何かある、何かできる」。そんなワクワク・ドキドキ感のある「私たちのセントレア」になってほしいですね。

